

ペレゴ・ジヨヴァンニ神父

イタリアはコモ州アイルノにて1912年8月29日出生。両親・兄弟姉妹の温かい愛情に育まれ、アイルノの小学校に通い、卒業。小学校卒業後、洋裁の修業をする。生涯その特技を活かす事になる。1931年より1935年までイヴレアのカルデナル・カリエロ志願院にて中学校生活ならびに志願期を過ごす。その後、同志願院にて1935年7月24日セリエ神父のもと着衣。1935年12月16日宣教師として来日。東京の修練院にて修練開始。1年の修練期を経て、1936年12月29日初誓願を宣立。身も心も神に捧げ、日本の青少年のため生涯を捧げる事を約す。

1937年から1988年まで2年間哲学の勉強に専念する。1938年より1939年まで中津養成院（児童養護施設聖ヨゼフ寮の前身）にてアッシステンスニアに従事。当時養成院にいた生徒のひとりとは当時をしのび「日本語を上手にあやつれないペレゴ先生をからかい、怒らせたり、たくさんいたずらをした」述懐していた。

1939年より1941年まで宮崎小神学校にて中間期を過ごし、1939年12月29日同小神学校にて有期誓願を更新した。1941年中間期を終えて、東京に戻り、翌1942年まで哲学の勉強をする。同年11月8日東京神学院にて終生誓願を宣立。

1942年より1946年まで神学の勉強にいそしむ。1945年12月22日司祭に叙階される。

1946年より1947年まで宮崎小神学校に赴任。司牧・アッシステンスニア・カテキスタに従事。

1947年より1948年9月まで中津教会の助任・中津養成院のアッシステンスニア。

1948年より1963年まで東京サレジオ学園に勤務。聴罪司祭および洋裁指導主任となり、児童養護施設の子どもの達の職業指導に専念する。多くの若者が洋裁技術を身につけ、巣立って行った。

1963年から中津ドン・ボスコ学園勤務となり、聴罪司祭および洋裁指導主任を務める。ボスコ学園の卒園生にも洋裁で生計を立てている者がいる。洋裁室には、文鳥やカナリヤなどの小鳥がたくさんいた。小鳥を育てる技術も持ち合わせておられた。

二十数年前から新田原聖母病院に入退院を繰り返していたが、入院中は洋裁の技術を駆使した文化刺繍をしたり、同病院に入院している患者や近隣の信者達に刺繍を教えていた。セッキ神父はペレゴ神父の以外なエピソードを語る。「彼は神学生の時からわたしの敬愛屋だった。頼むとすぐに応じてくれた。不言実行の人だった」と。また、聖務日課をこよなく大切にされた。晩年、曜日を間違えたり、同じ個所を何度も何度も読みだりしていた。やめて、ロザリオに代えたたと勧めると「聖務日課は司祭の重大なつとめだから、止められない」と答えたとはセッキ神父の談。その大切な聖務日課も数年前から祈る事ができなくなった。敬虔に捧げていたミサも捧げられなくなり、毎日毎日ロザリオを唱える生活が始まった。新田原聖母病院の看護婦さんやシスターがたが深い感銘を受けた。彼の生活は

深い信仰に根づいたものであった。二十数年にわたる病床生活は彼の信仰を強め、深めた。

1998年6月新田原聖母病院で尿道閉塞のため尿が出なくなり、中津国立病院泌尿器科に転院、処置してもらった。7月9日病者の塗油の秘跡を授ける。1ヶ月泌尿器科に入院。その後、10月30日まで内科病棟に入院。徐々に食欲も落ち、点滴を受ける。パーキンソン病のため、小刻みからだをゆするのので、傷つきかやなくなった皮膚を刺激して床ずれを作ってしまった。

10月30日太陽福祉タクシーにて、新田原聖母病院に移送。

12月4日午前7時40分頃新田原病院より神父様の様態変化の知らせがあり、皆で急行し、病者の塗油の秘跡を授け、ロザリオの祈りをとなえる。

12月5日午前3時45分、新田原病院より神父様の呼吸停止の知らせを受け四人で急行。午前3時48分神に魂を返された。条件付きで病者の塗油の秘跡を授け、ロザリオをとる。午前7時10分頃御遺体を学園聖堂にお運びした。

神父様の二十数年にわたる病床生活はイエズス様の十字架を生きる事、ベッドのミサであり、償いの業であった。